

E・M・フォースターと二つの世界大戦

剣持 淑

I. 序

E・M・フォースター (Edward Morgan Forster, 1879-1970) は、ヴィクトリア朝末期の1879年1月1日、ロンドンに生まれた。ケンブリッジのキングス・カレッジに進み、古典と歴史を学び、卒業後、様々な土地を旅した経験が小説誕生の源泉になった。イタリア旅行がイタリア中世の塔が残る町モンテリアーノ (モデルはサン・ジミニャーノ) を舞台の一部にした小説『天使も踏むを恐れるところ』(*Where Angels Fear to Tread*, 1905) 及びルネサンス芸術の町フィレンツェを舞台の一部にした小説『眺めのいい部屋』(*A Room with a View*, 1908) に、ソールズベリー訪問が小説『いと長き旅路』(*The Longest Journey*, 1907) に、ドイツ (プロイセン) 訪問と滞在が小説『ハワーズ・エンド』(*Howards End*, 1920) に、インド旅行と藩王の秘書としての滞在が小説『インドへの道』(*A Passage to India*, 1924) にアイデアを与えたことはよく知られている。訪れた土地が持つ力が作家にインスピレーションを与え、登場人物がその土地の霊の影響を受ける物語へと発展していった。

イギリスが第一次世界大戦に参戦する直前、フォースターは、死後出版となる『モリス』(*Maurice*, 1971) の草稿を、1913年から1914年 (もしくは1910年から1912年)¹⁾ に、執筆した。それまでの小説の中で、異なる価値観の衝突と (小説中の) 現実世界での個人的人間関係 (personal relationship) における和合を試みてきた作家は、『モリス』では当時の世間に認められない関係を選んだ二人の男性主人公を森の中に逃避させた。そして、イギリスがインドを支配していた時代にイギリス人とインド人の友情は可能なのかを問うた『インドへの道』(1924) 以後、異なる価値観の衝突後の現実世界での和合を描くことを止めている。

二つの世界大戦を経験したフォースターは、当時のイギリスやヨーロッパ情勢とともに、旅先や赴任地での体験もふまえて、第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期、戦中、そして戦後に、言論の自由の大切さを訴え、帝国主義や異文化・異文明への偏見を厳しく糾弾するさまざまな評論を執筆し、講演を行った。本稿は、フォースターの歴史概説書『アレクサンドリア—歴史と案内』(*Alexandria: A History and a Guide*, 1922)、評論集『アビンジャーの収穫』(*Abinger Harvest*, 1936) と『民主主義に万歳二唱』(*Two Cheers for Democracy*, 1951) に収録されている歴史・戦争関連の評論及び小説『インドへの道』(1924) を主な手掛かりに、作家がどのように戦争と戦後の世界に向き合おうとしていたのかを考察するものである。フォースターは、戦時中から戦後の世界を想定し、評論や放送、言論の自由に関わる会議への参加を通して、世界の国々の共存と人々の相互理解という難題に立ち向かうためには、控えめではあるが消極的美徳である寛容と想像力が必要であることを人々に説いている。

II. フォースターと第一次世界大戦

1914年6月28日、オーストリア＝ハンガリーの帝位継承者フランツ・フェルディナンド大

公と妃ゾフィがサラエヴォで暗殺され、7月28日、オーストリア＝ハンガリーはセルビアに宣戦布告、ヨーロッパ列強を巻き込む大戦が始まり、8月4日夜半、イギリスとドイツは交戦状態に入った（『世界の歴史14』4-29）。1915年6月にはドイツのツェッペリン飛行船が初めてロンドンを攻撃し、その後1917年には爆撃機によるロンドン爆撃も始まった。ステイプ（J. H. Stape）の『E・M・フォースター年表』（*An E. M. Forster Chronology*, 1993）によれば、フォースターは、1915年11月にイギリスを出発、エジプトで3年間、国際赤十字の事務局の職員として行方不明者を探す任務につき、1918年11月にドイツが休戦条約に署名した後、1919年1月に帰国した（58-66）。任務期間中の仕事の合間にアレクサンドリアの街を探索したことで、歴史概説書が誕生することになる。

歴史概説書

『アレクサンドリア——歴史と案内』（1922）は、2200有余年にわたるアレクサンドリアの歴史と町の旅行案内書である。ベデカーのようなツーリズムのための旅行ガイドブック的な「案内」（A Guide）であるとともに、『ファロスとファリロン』（*Pharos and Pharillon*, 1923）²⁾と同様にアレクサンドリアの歴史を物語風に紹介した歴史概説書でもある。もともと歴史への関心があったフォースターは、第一次世界大戦中、時間的余裕ができると、赤十字の仕事の合間にアレクサンドリアの街を探索し、多くのエッセイを書くようになる。そして、訪れ、生活し、働いていた都市の歴史と案内を書くという着想をえて、アレクサンドリアの歴史を2250年前の時代から、歴史上の人物や創作した市井の人々が登場する物語風旅行案内書にまとめたのである。

『アレクサンドリア——歴史と案内』は1922年12月に初版が出版されたが、ステイプによれば、作家は1916年にこの歴史概説書のもとになっている古代と現代アレクサンドリアについての講演を行い、1922年10月から11月にも、アレクサンドリアについての8回の講演を行っている（59, 81）。本書は、宗教や王朝や帝国の変わり目の戦いや不安な情勢などの記述もありながら、アレクサンドリアへの憧れを抱かせ、この都市の時代の諸相をもっと知りたいと思わせるような歴史的な魅力をもつ街の案内書に仕上がっている。第一次世界大戦のさなか、非戦闘員ではあるけれども国際赤十字の事務局の職員として働いた作家は、戦時中に見分した事柄を、都市の歴史として作品に昇華させた。創造された人物たちとともに、読者の心の中でアレクサンドリアの街は幾度もよみがえる。歴史の記録を目指したのではなく、あの時代のあの場所にいた普通の人間たちの生活を描こうとしたものであると言える。次に、戦闘員として戦争を体験した二人の人物T・E・ロレンス（Thomas Edward Lawrence, 1888-1935）とエドワード・ギボン（Edward Gibbon, 1737-94）について書いた評論を読み、フォースターが二人の作品のどこに注目したのかを検討する。

III. ロレンスとギボン

1923年12月、フォースターは、痛烈な戦争詩を書いたシーグフリード・サスーン（Siegfried Sassoon, 1886-1967）から借りて読んだ、T・E・ロレンスの『知恵の七柱』（*Seven Pillars of Wisdom*）（1922年オクスフォード・タイムズ社で印刷された校正原稿（第3稿））に非常に興

味をもつ。フォースターとロレンスとの交際は、1924年に始まり、『知恵の七柱』の改訂作業を進めていたロレンスに助言を与えることになる。ロレンスの死後、「T・E・ロレンス」(“T. E. Lawrence”) (*Listener*, 31 July 1935; 後に*Abinger Harvest* (1936) に収録) と「クラウド・ヒル」(“Clouds Hill”) (*Listener*, 1 September 1938; 後に*Two Cheers for Democracy* (1951) に収録) を発表した。

「アラビアのロレンス」として知られる、T・E・ロレンスは、オックスフォード大学で歴史を学び、在学中、中東での遺跡調査を行った。卒業後、考古学調査で再び中東を訪れ、イギリス陸軍の依頼で軍用の地図を作成した。第一次大戦勃発後は、イギリス陸軍に勤務し、アラブ人の部隊とともにオスマン帝国軍と戦い、1917年のアカバ陥落や1918年のダマスカス占領にかかわった。『完全版 知恵の七柱』(1935年) の編集者ジェレミー・ウィルソンによれば、やがて『知恵の七柱』となる本を書こうという気持ちは1917年9月2日付けのC・E・ウィルソンあての書簡に記され、さらに1926年6月11日付けのシャーロット・ショーあての書簡でも述べられていた。(「編者改題」, 田隈恒生訳『完全版 知恵の七柱 5』, 282-83) ³⁾

『知恵の七柱』の「序説」によれば、『知恵の七柱』を最初に執筆したのはパリ講和会議中(1919年1月～4月)であった。もともになったのは、進軍の間に日々書きとめたノートにカイロの上司に送った報告を加筆したもので、1919年秋にこの初稿とノートの一部が失われたため、1919年冬から1920年にかけて再び書き上げられた。しかし、新たな関心がわいてきて初稿の鋭さは失われていった。この中で語られるのは、「アラブ運動の歴史ではなく、ロレンス自身に起こった出来事である。そこには、世間への教訓も人を感動させるような大事件もない。その話は些細なものごとに満ちている。」日々の生活であり、取るに足りない出来事であり、つまらない人々のことである。(Lawrence, “Introductory Chapter,” *Seven Pillars of Wisdom*, 5-6) ⁴⁾

ロレンスが「序説」で記しているように、彼もまた歴史の記録を目指したのではない。戦場の出来事を、人を感動させる大事件として描きたかったのではなく、あの時代のあの場所で起こった「取るに足りないできごと」(“mean happenings”)として描こうとしたのである。田隈恒生訳の『完全版 知恵の七柱』では「あさましいできごと」と訳されている。映画『アラビアのロレンス』(1962) は、アラブ民族の独立闘争を率いたピーター・オートゥール演じる軍人T・E・ロレンスの冒険と苦悩と波乱に満ちた生涯を壮大なスケールで描いたものであり、ロレンスが『知恵の七柱』で描きたかったものではなかった。ロレンスが描きたかったのは、戦時下の社会的には高位にある人々を含むが、歴史上の英雄ではなく、そこに生きていた人間たちであり、普通の「つまらない人々」(“little people”)の日々の生活であった。

T・E・ロレンスの『知恵の七柱』と評論「T・E・ロレンス」

T・E・ロレンスの著書『知恵の七柱』を読んでフォースターがどこに心を動かされたのかについて検討する。ロレンスが1935年5月に亡くなった後、フォースターは7月に「T・E・ロレンス」(“T. E. Lawrence,” *Listener*, 31 July 1935 初出; 後に*Abinger Harvest* (1936) に収録) を発表した。『知恵の七柱』の中でロレンスは「アラビア民族のトルコに対する反乱を、それに参加した一人のイギリス人の立場で描いているのであり、「彼自身が主要な役割を演

じた」と言うことを彼は許さないだろう。」(“T. E. Lawrence” in *Abinger Harvest*, 140) と、フォースターは記している。ロレンスもフォースターも共に、戦時中に訪れた土地で作品の着想をえている。ロレンスは、戦時中から日々メモをとっており、その地で誰が何をし、何が起こっていたのか、経験したばかりの戦場や会議場での個人的な体験を具体的に記述していた。フォースターは、ロレンスの作品に当事者による歴史の記録としての価値よりも、一人の人間としてあの時あの場所で見て聞いて感じたことが綴られていることが大切であると考えたように思われる。

八木谷涼子の「T. E. ロレンス年表」によれば、ロレンスは、戦争終結後、1919年には第1稿(約25万語)を書きあげていたのだが、いわゆるオクスフォード版第3稿は33万語の長さであった。冗長さをおそれて、ロレンスはそれから5万語を削る仕事に取りかかった。⁵⁾ フォースターいわく、「削られた中には冒頭の章全部が含まれているが、本の理解の助けとなり、読者をやすやすと行動へと導入する部分だったから、これは残念である。(その削除された一文が私の記憶に残っている。「大英帝国の属領すべてを合わせても、私にとっては一人の死せるイギリス人の少年に値しない。」これは「剣はまた清潔と死を意味する」という、今回の版の扉に刻まれた文章によって消されてしまった)」(“T. E. Lawrence,” 142) ⁶⁾。

「大英帝国の属領すべてを合わせても、私にとっては一人の死せるイギリス人の少年に値しない」(“All the subject provinces of the Empire to me were not worth one dead English boy”)の一文は、「本の理解の助けとなり、読者をやすやすと本文に引き込んでしまう部分であった」という記述から、ロレンスの心の内と価値観を考える手がかりになったと思われる。個人的人間関係を重視し、ひとりひとりの個の存在と個人の思いを大切にしたいとするフォースターにつながるものと考えられる。フォースターは1938年執筆の「私の信条」(“What I Believe”)の中で「私は個人的人間関係を信じる。・・・国家を裏切るか友を裏切るかと迫られたときには、国家を裏切る勇気を持ちたいと思う」(“I believe in personal relationships... if I had to choose between betraying my country and betraying my friend, I hope I should have the guts to betray my country”) (*Two Cheers for Democracy*, 68) と述べている。

評論「T・E・ロレンス」の中でフォースターが『知恵の七柱』の紹介に選んだ箇所は、戦場の場面ではなく、岩の間から流れ出した水でできた水たまりでロレンスが水浴びをしていた時にやってきた老人とのエピソードを描いた場面である。そこで、ロレンスの人となりとして「勇気、寛容、共感という三つの英雄的資質」(“he certainly possessed the three heroic virtues: courage, generosity, compassion”) (*Abinger Harvest*, 144) について述べたあと、さらに「底に潜む無私の精神」と「根本的な普段の善意」⁷⁾ についても言及する。

テキストが暗示するのは「愛は神から来たる。愛は神のもの。神に向かうもの」だろうか。それほど神学的ではないが、底に潜む無私の精神と、彼自身の苦しみや炎がそれを共感と融合させているところの、根本的な普段の善意がそこにはある。(Abinger Harvest, 145-46)

『知恵の七柱』の中で、フォースターがロレンスの中に読み取った寛容や善意は、作家自身

が小説『インドへの道』や評論「寛容」(“Torelance”)の中で大切なものとして描いている資質である。それらが作家自身の中にもある資質であるがゆえにロレンスの中のそれらに共鳴し、気づいたのであろう。

「ギボンと自叙伝」

第二次世界大戦中に発表した、フォースターの「ギボンと自叙伝」(“Gibbon and his Autography” in *Two Cheers for Democracy*; *London Calling*, 30 July 1942 (“Edward Gibbon, the Historian”; “broadcast in the B.B.C.’s North American service”)) は、歴史家エドワード・ギボンについて語ったものである。『ローマ帝国衰亡史』(*The History of the Decline and Fall of the Roman Empire*, 1776-88) の著者は、七年戦争(1756-63)の終わりの1762年末に除隊し、翌年からグランド・ツアーに出かけ、訪れたローマの地でローマの衰亡を書くという着想をえた。

It was at Rome, on the 15th of October, 1764, as I sat musing amidst the ruins of the Capitol, while the barefooted friars were singing vespers in the Temple of Jupiter, that the idea of writing the decline and fall of the city first started to my mind. (“Gibbon and his Autography” in *Two Cheers for Democracy*, 162)

「このローマの地で、ローマの衰亡を書く」という着想をえたと自叙伝に記したギボンと同様に、もともと歴史への関心があったフォースターも、前述したように、赤十字の仕事が多忙ではなくなり、アレクサンドリアの街を探索する時間的余裕ができると、多数のエッセイを書くようになり、アレクサンドリアの歴史と案内を書くという着想をえた。戦争を経験して書かれた作品ということもあり、戦いや不安な情勢などの記述もありながら、アレクサンドリアという都市の時代の諸相を魅力的に伝える歴史の入門書に仕上がっている。

Ⅲ. 個人的人間関係 (personal relationship) の限界

1910年出版の『ハワーズ・エンド』(*Howards End*) では、フォースターは、異なる価値観や思想を持つ人々を「ただ結びつけさえすれば・・・」(Only connect...), 争いあう社会が調和したものとなるだろうと考えていたように思われる。しかしながら、第一次世界大戦を経験した後は、そのような調和の世界を小説の中にさえ創造することが困難になっていく。評論「芸術のための芸術」(“Art for Art’s Sake”) (*Harper’s Magazine*, August 1949; 後に *Two Cheers for Democracy* (1951) に収録) の中で、フォースターは「秩序とは外から課せられる何かではなく、内から生まれ出る何かである。内なる安定、生命の調和である」(“Order, I suggest, is something evolved from within, not something imposed from without”) (*Two Cheers for Democracy*, 90) と述べる。さらに、「秩序が存在する可能性は芸術的範疇にあり」、その秩序は「芸術家が自分の作品の中に創造する秩序である。・・・芸術作品が唯一無二の産物なのは、芸術が宇宙の中で、内なる調和を持ちうる唯一の物体であるからだ」(“The second possibility for order lies in the esthetic category. . . : the order which an artist can create

in his own work. A work of art . . . is a unique product . . . because it is the only material object in the universe which may possess internal harmony”) (*Two Cheers for Democracy*, 92) と述べている。ゆえに、フォースターが新たな小説を完成させることができなくなったのは、エドワード朝時代の小説のように異なる価値観の衝突の後にはや「秩序」と「内なる調和」を創造することができなくなったためかもしれない。

『インドへの道』

最初のインド旅行（1912年10月～1913年4月）の後、フォースターは『インドへの道』の執筆に取りかかり、第一次大戦後、藩王の私設秘書として赴任（1921年3月～1921年10月）し、1922年1月に帰国後、1924年1月にやっと小説を完成させた。

『インドへの道』は、在印イギリス人（Anglo-Indians）が支配するインドの町チャンドラポア（Chandrapore）の官立コレッジ（Government College）の校長フィールディング（Cyril Fielding）とインド人でイスラム教徒の医師アジズ（Dr Aziz）の人間関係（personal relationship）が興味深い。ムア夫人（Mrs Moore）はこの町の治安判事になっている息子ロニー（Ronny Heaslop）に頼まれて、ロニーと結婚しそうには見えなかったのだけれども、アデラ・クエステッド（Miss Adela Quested）をイギリスから連れてくる。

息子ロニーに向かって、ムア夫人はインドに住むイギリス人の横柄な態度を非難する。それに対するロニーの言葉は、当時の在印イギリス人の典型的な考え方であろう。「我々は正義をなし治安を維持するためにやってきたのです。・・・僕は働くためにここへ来たのです。このみじめな国を力で握るために、ここへ来たのです。牧師でもなければ、労働党の代議士でもない。感傷的で同情的な文学者でもない。僕は政府の役人にすぎません、あなたが僕に選ばせたのがこの職業です。職業は職業です。愉快でもないし、愉快なふりもしません。僕にはもう少し重要な務めがあるのです。」それに対してムア夫人は、「イギリス人はこの国へ来たらみんなに喜ばれるようにしなければなりません」と反論する（*A Passage to India*, 43-45）。

アデラがアジズを訴えたマラバール洞窟（the Marabar Caves）事件の裁判では、インド人と在印イギリス人の反目が決定的になるが、アデラの勇気ある正直さにより裁判はアジズの無罪判決で終わった。しかし、アジズは誤解もあり、裁判で味方についてくれたフィールディングに裏切られたと思い込んでしまう。裁判ののち、フィールディングはイギリスに帰国する。一方、マウで文部大臣となっているヒンズー教徒のゴドボール教授（Professor Godbole）のおかげで、アジズはマウに来て医者をしている。2年後、フィールディングは僻地の諸州の英語教育の状況を視察するため、インド巡歴の途中でマウに妻とその弟とともに立ち寄る。ヒンズー教の祭りの日、マウの貯水池で2艘のボートが衝突しイギリス人もインド人もずぶ濡れになったことで、イギリス人フィールディングとインド人アジズの個人的人間関係による国を越えた友情は、一度は取り戻せたかに見えた。

けれども、再び会うことはできないように思えて、二人はマウの密林に馬で遠乗りに出かける。とはいえ、未来に望みがないわけではない。植民地独立運動の機運の高まりと次のヨーロッパ大戦への言及がある。（“Until English is in difficulties we keep in silent, but in the

next European war—aha, aha! Then is our time.”) (*A Passage to India*, 311) 被支配者側からの態度表明があり、大戦後の世界情勢の変化を示唆し、教育に携わる人物を登場させ、当初アジズ側にだけ子供（息子2人と娘1人）がいたのであるが、ロニー・ヒースロップのフィールディングへの手紙（“Glad about your son and heir”）(*A Passage to India*, 298) が示すように、小説の終盤にはフィールディング側（妻ステラ (Stella) はムア夫人の娘）にも子供が生まれた設定にすることにより、両国の子供たちに未来を託している。『いと長き旅路』や『ハワーズ・エンド』から続く、フォースターの小説に登場する次世代を担う子供の扱いに合致する。

小説の最後では、アジズは理解と寛容さを示す。マラパール洞窟の事件でかつて彼の人生を破滅させかけたアデラ・クエステッドにさえ裁判での勇気を認め、彼女に伝えたいと言う。あなたのおかげで今の自分の幸せがあると、あなたのことを自分の子供たちが親愛と尊敬の念を持って話すように教えると。（“I thought how brave Miss Quested was, and decided to tell her so, despite my imperfect English. Through you I am happy here with my children instead of in a prison, of that I make no doubt. My children shall be taught to speak of you with the greatest affection and respect.”) (*A Passage to India*, 308)

この場面で、差別される側の人間が怒りを乗り越える方法として、あるライターの言葉が示唆的である。

人は誰だって間違いを犯す。その起因となるのは「無知」であることも少なくない。それを指摘するのは“怒り”や“哀しみ”だろう。

しかし、ただ声を上げるだけでは溝が深まるだけなのかもしれない。

その先にある、人と人とのつながりを望むのであれば、きっと「許す」ことが必要なのだと思う。（五十嵐大）

差別されてきた側が「怒り」や「哀しみ」を表明し、差別してきた側がそれを理解し態度を改めたなら、「赦す」ことによってその先に人と人とのつながりが可能になるのかもしれない。

しかしながら、集団の中の個人である限り、個人にはどうすることもできない状況がある。アジズはフィールディングに向かって叫ぶ。自分の時代で無理なら、自分の子供たちの時代に、それが無理なら、たとえ50年、500年かかってもイギリス人をインドから追い出すのだ。そうしたら、あなたと私は友人になれると。（“If I don’t make you go, Ahmud will, Karim will, if it’s fifty or five-hundred years we shall get rid of you, yes, we shall drive every blasted Englishman into the sea, and then”—he rode against him furiously—“and then,” he concluded, half kissing him, “you and I shall be friends.”) (*A Passage to India*, 312) 作家は、近い将来にイギリスとインドの関係が改善されると期待しているわけではないだろう。イギリスに支配された今のインドではまだだめだ。イギリス人を追い出してしまいうまで、すなわち、インドが独立してインド人とイギリス人が対等の立場になるまでは、と否定的な結論を下して小説は終わる。インドの大地や見えるものすべてが「まだだめだ」と言い、空の「そこではだめだ」（“they said in their hundred voices, ‘No, not yet,’ and the sky said, ‘no

not there.’”(A *Passage to India*, 312) という象徴的な否定的な言葉で締めくくられている。

『インドへの道』の成功後、1929年9月にエジプトで行われたインタビューにおいて、「インド関連の本をまた執筆されますか」(“Will the great success of your book, *A Passage to India*, move you to write another novel connected with India?”)という間に、フォースターは「いいえ。イギリスとインドの関係の主題については言わなくてはならないことは語りました」(“I don’t think so. I think that in this book I expressed whatever I had to say on the subject of Anglo-Indian relations.”) (Hilda D. Spear and Abdel Moneim Aly, eds., *Forster in Egypt: A Graeco-Alexandrian Encounter*, 47) と答えている。小説は在印イギリス人のインド人を見下す態度の問題を大きく指摘してはいる。しかしながら、個人レベルで在印イギリス人が態度を改めれば両国の関係までも変わるとか、すぐに国際紛争が解決するとか、そのような簡単な話ではないことは、否定的な言葉での小説の終わり方からも明らかである。

IV. 戦間期から第二次世界大戦へ

「イギリス国民性覚書」

第一次世界大戦後、1925年10月にスイスのロカルノで協議され、12月1日に、ロカルノ条約 (Locarno Treaties)として、ロンドンで7つの協定が正式調印された。これらは、イギリス・フランス・ドイツ・イタリア・ベルギーの5ヶ国における地域的集団安全保障条約である。フランス、ベルギー、チェコスロヴァキア、およびポーランドはドイツとの間でそれぞれ仲裁裁判条約を締結し、ドイツが締約国のいずれかに対し武力行使をした場合を想定して、フランスとチェコスロヴァキア、フランスとポーランドの間では相互援助条約が締結された。ヨーロッパ諸国がドイツに対する疑念を持ちつつも条約締結により平和を確保できると考えようとしていた時期に、「イギリス国民性覚え書き」(“Notes on the English Character”) (1926年1月、『アトランティック・マンズリー』(*Atlantic Monthly*) に初出; *Abinger Harvest* (1936) に収録) が発表された。

この覚書では、1919年のアムリツァーの大虐殺 (the Amritsar massacre) のような国辱的事件があり、イギリスにも残忍で人を裏切る人間はいるが、裁判所や軍を見たのでは、国民の魂を見ることにはならず、イギリス人に会えば会うほど、こういう非難は的外れだという確信が強まると述べる。イギリス人はそれほどの悪人ではなく、本当に冷たいわけではない。イギリス人の国民性は不完全であり、どの国の国民も完全なものはない。間違っているのは仕組みであると述べている (*Abinger Harvest*, 14-15)。

ロカルノ条約により独仏の関係が緩和し、ヨーロッパがしばらくの間、相対的に安定することが期待された時期に、「世界の国々は互いに、それも至急、理解し合わなくてはならない。しかも、政府の介入なしに。というのは、地球が小さくなった今各国の運命は互いの腕にゆだねられようとしているのだから。」(“The nations *must* understand one another, and quickly; and without the interposition of their governments, for the shrinkage of the globe is throwing them into one another’s arms”) (*Abinger Harvest*, 15) とフォースターはまとめる。

国民性が理解されると、国同士の相互理解の改善の助けになるのだろうか。この一見して

楽天的な思考は、ヨーロッパ大戦が避けられそうにない国際的緊張の高まりという現実の難題を前にしてゆらぐ。かつて『インドへの道』で、個人的人間関係が解決されれば、文明の問題も解決されるかもしれない、イギリス人がインド人に礼儀正しくしさえすれば両民族の紛争はいつか解決に向かっていくかもしれないと示唆していたこともあったが、現実はそんなに簡単なことではないことをフォースターは認めざるをえない。

ジョナサン・ローズ (Jonathan Rose) は『エドワード朝人の気質1895-1919』(*The Edwardian Temperament 1895-1919*) の中で、英国エドワード朝の時代の思潮について、人々は異なるものの和合を進めようとし、価値観だけでなく、人々にも当てはめようとした時代で、しばしば個人的人間関係が流行していたと述べている(40)。ローズによれば、フォースターは、1939年1月28日にノッティンガムのユニヴァーシティ・カレッジで、「三代目」(E. M. Forster, “Three Generations,” lecture at University College, Nottingham, 28 January 1939 in E. M. Forster Papers, King’s College Library, Cambridge University, vol. 16, fols. 183-86) という講演を行った。その中で、彼が1912年にインドを訪れた際には、イギリス人がインド人に対する不遜な態度を改めれば、異なる両民族の間に起こる問題は解決されるだろうと思っていたが、それは例えば経済問題面も含めて問題の要因について考えが足りなかったのだと気づき、「エドワード朝人は個人的人間関係を神のごとく崇め、そのふさわしい領域を超えて個人的人間関係が機能することを期待していたのだ。」(“We deified personal relationships and expected them to function outside their appropriate sphere.”) (qtd. Rose, 40) と語っている。

エドワード朝のフォースターは、出版した4つの小説すべてにおいて個人的人間関係を理想化し、異なる価値観を結びつける力を持っているかのように描いていた。しかしながら、この講演の数か月前の1938年9月には、ヒトラーがナチス党大会でチェコ領ズデーテン地方合併を要求し、10月にはドイツ軍がズデーテンへ侵入しており、1939年1月にはヨーロッパでは開戦が予想されるほどに国際的緊張が高まっていた。世界恐慌以降くすぶり続ける経済問題をヨーロッパの一部では武力で解決しようとしていた時代、遠からず再び世界大戦に向かい始めた時代であった。

「私の信条」

ステイブによれば、フォースターは1938年1月9日に「私の信条」(“What I Believe”)執筆にとりかかり、1938年7月、「民主主義に万歳二唱」(“Two Cheers for Democracy”)としてニューヨークの『ネイション』(*Nation*) に発表した。これは後に「私の信条」(“What I Believe”)として評論集『民主主義に万歳二唱』(*Two Cheers for Democracy*, 1951) に収録された(Stape, 125-26)。フォースターは、宗教的、民族的迫害によって引き裂かれた世界では、本当に大事な寛容や善意や同情などでは間に合わないで、自衛上誰もが自分の信条を作らざるを得ない現代は信条の時代であるけれども、「私は絶対的信条を信じない。」(“I DO NOT believe in Belief.”) (*Two Cheers for Democracy*, 68) と述べる。そして、自分はひとりの個人主義者で自由主義者であり、言論が比較的自由なうちに言いたいことは言っておきたいが、この自由もそれほど長くは続かないだろうとまとめている。

「寛容の精神」

「寛容の精神」(“Tolerance”) (*Listener*, 31 July 1941, and *Vital Speeches of the Day*, 15 October 1941, both as “The Unsung Virtue of Tolerance,” *Two Cheers for Democracy* (1951) に収録) では、敵国の人々とも共存しなければならない戦後世界を想定して、控えめではあるが、消極的美徳の寛容と想像力の必要性を説いている。「ある民族が嫌いでも、できるだけ我慢するのです。愛そうとしてはいけません。そんなことはできないので、・・・ただ、寛容の精神で彼らのことを我慢するように努めるのです。このような寛容の精神が土台になれば、文明の名に値する未来を築けるでしょう。それ以外に、戦後世界の基礎は考えられません。」(“If you don’t like people, put up with them as well as you can. Don’t try to love them But try to tolerate them. On the basis of that tolerance a civilized future may be built. Certainly I can see no other foundation for the post-war world.”) (*Two Cheers for Democracy*, 46)

フォースターは、敵だったドイツ人とも戦後の世界では共存していかななくてはならないのだから、平和が来たときには寛容の精神が絶対に必要であるという。そして、他人の狂信的な精神を指摘するのは容易だが、自分のそれを見抜くのは難しいこと (“it is very easy to see fanaticism in other people, but difficult to spot in oneself”) (*Two Cheers for Democracy*, 47) を指摘する。ここで想像力が必要であると考えられる。最後に、寛容は弱さとは違うこと、人に対して我慢することは屈服することではない (“Tolerance is not the same as weakness. Putting up with people does not mean giving in to them”) (*Two Cheers for Democracy*, 48) ことが指摘される。

反ファシズム会議と市民的自由のための全国協議会

フォースターは1935年6月21日～25日にパリで開催された反ファシズム主義の国際作家会議 (The International Writers’ Congress at the Palais de la Mutualité) において、「イギリスにおける自由」(“Liberty in England”) について演説した。小野寺健も『E・M・フォースターの姿勢』の中で、「BBCで戦時中に実施された言論統制策を検討する集まりにも参加した彼は、一貫して言論の自由のために戦」(278) っていたことを指摘する。1938年12月には、「市民的自由のための全国会議」(The National Council for Civil Liberties (NCCL : 一般市民の自由と権利の守護・拡大をはかり、差別や権利の乱用と戦うことを目的とした団体)) にも参加し、1940年9月15日、22日、29日には、反ナチズムと文化についての放送 (anti-Nazi talks in a series on Nazism and Culture) を行い、さらに9月26日にリスナー (*Listener*) に “Two Cultures: The Quick and the the Dead”, 10月3日にロンドン・コーリング (*London Calling*) に “What has Germany done to the Germany?”, 10月10日にもロンドン・コーリングに “What would Germany do to the Britain if She Won?” を発表した (Stape, 131)。1941年1月に「表現の自由」 (“Freedom of Expression”) について、3月にもNCCLで「BBCと見解の自由」 (“The BBC and Freedom of Opinion”) について話している。第二次世界大戦前も戦時中も反ファイズムの国際会議で講演をしたり、言論の自由について講演をしたり、

雑誌でドイツの脅威について発表したりするような、非暴力の行動を伴った「平和主義者」(pacifist)であった。

V. まとめ

両大戦中及び戦間期のE・M・フォースターの活動と、時代を反映する小説や評論をもとに、作家が戦争と戦後の世界にどのような心構えで向き合おうとしていたのかを検討してきた。作家は、当時のイギリス・ヨーロッパ情勢とともに、旅先や赴任地での体験もふまえて、言論の自由の大切さを訴え、帝国主義や異文化・異文明への偏見を厳しく糾弾するさまざまなエッセイを執筆し、講演を行った。第一次世界大戦中のアレクサンドリアでの国際赤十字の職員としての勤務、インド旅行と滞在を経て書かれた『インドへの道』、及び第二次世界大戦前・戦中・戦後の評論と講演に注目した。フォースターは、『インドへの道』以後は、新たに小説で調和の世界を描くことをあきらめるが、戦後世界を想定し、いかに共存するかを考え始め、評論や放送、言論の自由に関わる会議への参加を通して人々にその考えを発信し続けた。また、戦時中から、敵国の人々とも共存しなければならない戦後世界を想定して、控えめではあるが、消極的美徳の寛容と想像力の必要性を説いた。フォースターは非暴力の行動を伴った「平和主義者」であった。過去にただ思いをはせるよりも、戦後の困難な世界情勢を想定し、世界の国々の共存と人々の相互理解という難題に立ち向かうために大切な心構えと教育の可能性を示そうとした作家であると考ええる。

注

- 1) ケンブリッジ大学キングス・カレッジの文書館 (King's College Archives) のthe Forster Papersの一次資料には、制作年について1910-1912とタイプされたものが1913-1914と修正されている版がある。(Yoshi Kenmotsu, *Moral Dilemmas of the Middle Classes in E. M. Forster's Novels*, 7-8)
- 2) 前半の「ファロス」では、まず、ファロス島の歴史について、トロイ戦争が終わりメネラオスが帰還の途についたあたりから語り始められる。後半の「ファリロン」では、ファロス大灯台は崩れ去りファリロン灯台が代わりに立っている。1779年の夏、アレクサンドリアにやってきたヨーロッパ人の夫妻が遭遇する様々な事件が語られ、やがて現在のアレクサンドリアのスケッチにかわる。
- 3) 「本を書こうという意味は、早くも1917年9月の書簡 [C・E・ウィルソンあて1917年9月2日づけ書簡。DGp.236] に述べられている。ロレンスは携行の軍用箋にメモを取ることを始めたが、敵の手に渡る恐れから軍事に関わることは触れず、事物の描写が中心だった。人物や場所の要点が、絵を見るように記されることもあった。ロレンスがのちに「あまり場所や日づけにこだわらず、移動中に鞍上で思うことをつづったものです。走り書きの地図、部族民に関するメモ、自分だけの寸描、愚痴、そんなものにすぎません」[シャーロット・ショナーあて1926年6月11日づけ書簡。Letters I, p. 183] と書いたものだ。」(J・ウィルソン編「編者解題」、田隈恒生訳『完全版 知恵の七柱 5』、282-83)

4) 『知恵の七柱』の日本語訳は田隈恒生訳『完全版 知恵の七柱』(東洋文庫777; 平凡社) を参考にさせていただいた。本文引用箇所の内容は以下のとおり。The story which follows was first written out in Paris during the Peace Conference, from notes jotted daily on the march, strengthened by some reports sent to my chiefs in Cairo. Afterwards, in the autumn of 1919, this first draft and some of the notes were lost. . . . In these pages the history is not of the Arab movement, but of me in it. It is a narrative of daily life, mean happenings, little people. Here are no lessons for the world, no disclosures to shock peoples. It is filled with trivial things, partly that no one mistake for history the bones from which some day a man may make history, and partly for the pleasure it gave me to recall the fellowship of the revolt. (T. E. Lawrence, 'Introductory Chapter,' *Seven Pillars of Wisdom*, (Ware, Hertfordshire: Wordsworth Editions, 1935 & 1997) (5-6)

5) ロレンスは1919年にAll Souls College, Oxfordの特別研究員(リサーチ・フェロー)に選出されたこと(年額£200を受領)により、『知恵の七柱』の執筆が可能となった。しかし、第1稿を駅で紛失し、すぐに第2稿に着手、1920年には第3稿(約33.5万語)に着手した。1922年5月9日、第3稿完成。1926年11月、予約者版『知恵の七柱』(約25万語)刊行。1927年3月、予約者版の短縮版『砂漠の反乱』(*Revolt in the Desert*) 刊行。1935年5月にロレンスが交通事故で亡くなった後、1935年7月、『知恵の七柱』の簡約普及版刊行。1973年、簡約普及版の無削除版刊行。1997年11月、ジェレミー・ウィルソン編の完全版『知恵の七柱オクスフォード・テキスト』第1版刊行。(八木谷涼子「T. E. ロレンス年表」、『完全版 知恵の七柱 5』)

6) 本文引用箇所の内容は以下のとおり。It contains nearly 330,000 words, and was printed by the *Oxford Times* in double column on one side of the paper. Fearful of prolixity, the author set to work to cut it down by 50,000 words. He removed, among other passages, the entire opening chapter, which seems a pity, for it was a helpful piece of writing and propelled the reader easily into the action. (One sentence in that cancelled chapter always stays in my memory: 'All the subject provinces of the Empire to me were not worth one dead English boy': a sentence to be weighed against 'The sword also means cleanness and death,' which is stamped on the cover of the present volume.) ("T. E. Lawrence," 139-40)

7) 「T・E・ロレンス」の日本語訳は『E. M. フォースター著作集 9 アビンジャー・ハーベスト I』(みすず書房)の北條文緒訳を参考にさせていただいた。

引用文献

Forster, E. M. *Alexandria: A History and a Guide and Pharos and Pharillon*. London: André Deutsch, 2004.

----- *Abinger Harvest*. 1936. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1964.

----- *A Passage to India*. 1924. Edward Arnold: London, 1978.

----- "Gibbon and his Autography" in *Two Cheers for Democracy*. 162-66.

----- "Notes on the English Character" in *Abinger Harvest*. 3-15.

----- "T. E. Lawrence" in *Abinger Harvest*. 141-47.

- . "Tolerance" in *Two Cheers for Democracy*. 44-48.
- . *Two Cheers for Democracy*. 1951. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1979
- Kenmotsu, Yoshi. *Moral Dilemmas of the Middle Classes in E. M. Forster's Novels*. Eichosha, 2003.
- Lawrence, T. E. "Introductory Chapter." Edited by J. Wilson. *Seven Pillars of Wisdom*. Ware, Hertfordshire: Wordsworth Editions Limited, 1935 and 1997.
- Rose, Jonathan. *The Edwardian Temperament 1895-1919*. Athens, Ohio: Ohio UP, 1986.
- Spear, Hilda D. and Abdel Moneim Aly, eds. *Forster in Egypt: A Graeco-Alexandrian Encounter*. London: Cecil Woolf, 1987.
- Stape, J. H. *An E. M. Forster Chronology*. London: Macmillan, 1993.
- 五十嵐大 「あのとき母は初めて怒った。小学生のぼくが直面した障害者とその家族への「差別」」 [huffingtonpost.jp](https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_5e3cbd2cc5b6f1f57f0e2e5b). 2020 年 2 月 8 日 <https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_5e3cbd2cc5b6f1f57f0e2e5b>
- ウィルソン, J. 「編者改題」『完全版 知恵の七柱 5』.
- 江口朴郎編 『世界の歴史14 第一次世界大戦後の世界』中公文庫. 1975.
- 小野寺健 『E. M. フォースターの姿勢』みすず書房. 2001.
- 小野寺健, 川本静子, 小池滋, 北條文緒共訳 『E. M. フォースター著作集 9 アビンジャー・ハーベスト I』みすず書房. 1995.
- 田隅恒生訳 『完全版 知恵の七柱 5』平凡社. 2008.
- 八木谷涼子 「T. E. ロレンス年表」『完全版 知恵の七柱 5』.